

各 医 師 会 長 殿
福 岡 県 医 師 会 代 議 員 殿
次 期 福 岡 県 医 師 会 代 議 員 殿
福 岡 県 医 師 会 理 事 ・ 監 事 ・ 顧 問 ・ 参 与 殿
次 期 福 岡 県 医 師 会 理 事 ・ 監 事 殿

謹啓 春寒の候 貴殿益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、去る2月24日、九州医師会連合会は、次期日本医師会役員選挙について協議する常任委員会を開催（宮崎観光ホテル）いたしました。その席上、次期日本医師会会長選挙には、唐澤祥人東京都医師会会長を推薦し支援することを常任委員（九州各県医師会長）全会一致で決定いたしました。

福岡県医師会では、これに先立ち第31回全理事会（2月9日）において、理事・監事一致で唐澤祥人候補の推薦を決定したところです。

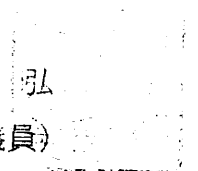
つきましては、ご参考までに、現植松治雄日本医師会会長に代わって唐澤祥人東京都医師会会長を次期日本医師会会長として推薦いたすにつきましての小職の所信を付させていただきました。

ご目見いただければ幸いです

謹 白

平成18年2月28日

福 岡 県 医 師 会
会 長 竹 嶋 康 弘
(次期日本医師会代議員)



次期日本医師会会長選挙に 唐澤祥人候補を推す

福岡県医師会

会長 竹嶋 康弘

私は、福岡市医師会会長を三期 6 年、福岡県医師会会長を一期 2 年務める間、執行部として「医政なくして医療なし」を基本理念に据え、自らも行動に努め、会員にも医政へ積極的に参加されることを訴えつづけてきました。

それは、私達日本国民が造りあげた世界に類をみない、唯一完熟した「国民皆保険制度」も、時の政府の政策によりいつでも瓦解され得る可能性があるからであります。

事実、この皆保険制度の歴史的経緯を見てもわかる通り、これまでも何度か危機的状況を迎えました。しかし、その都度、日本医師会は、医療政策集団として自らの政策を掲げ、政権与党の政策決定プロセスに、医系議員を通して関わり、軌道修正を行なってきました。増えつづける患者負担、医療の市場化を企図した医療特区構想、医療費の総枠管理や混合診療の導入、株式会社の医業への参入、保険免責制、そして、良質で安全な医療を担保する診療報酬に対しての大巾な引き下げへの反対、あるいは独自の高齢者医療制度の創設などなどがそうでありました。

そして、ここ一・二年間は、これらの施策が矢継ぎ早に出されてきましたが、植松治雄会長は、国民的運動と称した署名活動に専らエネルギーを費やし、医療政策集団として、厚労省や政府に対峙できるような説得あるデータや意見をもって政権政党の与党自民党や政府に膝詰めでの折衝をして来なかったと思います。

武見敬三、西島英利参議員の各種委員会での精力的な発言や他の同士議員への夜を徹しての働きかけのみが目につくと言っても過言ではありません。植松執行部が「600 万人の反対署名によってこれを阻止した」と自らの高い業績として宣伝している一昨年 12 月の混合診療導入の阻止についても、武見・西島両議員の懸命な奔走による政府与党議員 300 名の請願書をもって衆・参両議院の委員会付託がなされなかったことは明白な事実であります。逆を言えば、何千万人の署名を集めても、このような政治の場での必要且つ常識的なプロセスが働かなければ、生きたものとなりません。昨年 11 月から 12 月の初めにかけて精力的に私達が行った署名活動も、植松会長はいろいろな講演や会内誌の中で「1700 万を越える署名を衆・参両院議長に提出した。今国会の審議の中で有効に生きて来る」と確信をもって発言されていますが、12 月 20 日の通常国会冒頭の日に提出すると言っておき乍ら、これも遅れて 24 日に慌てて事務局に運び入れただけで、今回の署名簿提出は「陳情」扱いでしかありません。前回のような紹介議員を通しての「請願」ではありませんので、今後の医療関係法案の審議に影響を及ぼす保障は必ずしも期待出来ないというのが政治家や有識者の声でありました。

昨年、12 月中旬には、政府与党案が決まるとわかっているのに、署名活動の〆切り日を悠長に 12 月 12 日にしたままというのも理解できません。

事実私は、11 月末電話で植松会長に連絡をとり、政局の動きに合わせて、署名の〆切り日を早め、

与党自民党内での法案審議に影響を与えるようにしたがよいと申し入れましたが、残念ながらその後何も変えられませんでした。植松会長は「短期間にこれだけもの署名を集めた」と自ら、医師会の力を誇示しておられますが、会員が植松執行部の指導に期待し、どんなに苦勞して署名を集めたか、その苦勞が生かされなかった場合の責任をとる覚悟はおありだろうかとは極めて不信をもつに至りました。

そのような中、1月21日東京都医師会長唐澤祥人氏が次期日医会長選挙に立候補を表明されました。そして、2月18日、その選挙対策本部事務所開きが行われましたが、その席上、来賓として挨拶に立たれた武見敬三参議員が「(植松執行部の)日医が自ら改革する意志なくして、もはや医師会の将来はない。新たな医師会を確立するために、会員一丸となって尽力いただくようお願いしたい。(現植松執行部は)医療制度改革の議論の際、医療提供者側のまとまった意見を出すことが出来なかった。これが致命的に日医の地盤低下を招いた」と言い切られました。

そしてまた、今回の診療報酬の過去最大の大巾マイナス改定に関しても「自民党の有力議員から、理屈なくして診療報酬を上げてくれと言われても通らないと言われ、過去最大のマイナス改定を呑まざるを得なかった」と植松執行部の今回の対応を批判する発言をされたのもうなずけます。

また、12月8日の読売新聞では「7日、植松治雄会長は厚生労働省で川崎厚労相と会談し、12月中旬に改定する診療報酬の据えおきを求めた。日医は将来診療報酬について最低3%の引き上げなどと主張していたが要求を引き下げた」との記事が掲載されました。まだその当時私達は植松執行部が日医会員への公約通り診療報酬3%のアップへの努力を行っているものと信じていましたので、慌てて日医の役員に問い合わせたら、「これは誤報」だとのこと。少くとも即刻都道府県医師会長レベルにでもその由、通達(FAXでもよい)すべきものを数日おいてやっと連絡が来たような次第です。この対応を見て、私はどこまで植松執行部が診療報酬改定に会員の為汗を流しているか疑いました。「小泉首相の間は仕方がない」との声が会員の中にあるにせよ、執行部としては、ひたすら前に進む姿勢を見せるべきであります。緊張感の無い、そして達成感に欠けた植松執行部であると言わざるを得ません。

このように植松執行部率いる日医の無気力、不安定さを見抜いてか、医政において頼るべき政権与党である自民党は、今や日医と距離を置こうとしていますし、同じ医療に関わる行政の立場から、そして医療を提供する立場から共に政策を出し合って協調すべきところは共力していくはずの厚生労働省も、今や、日医を無視して、日医へ意見を求めることもなく矢継ぎ早やに次から次へと独自の施策を打ち出してきています。具体的にも中医協の場における今回の診療報酬改定作業において、医療型療養病床の今後6年間における大巾な病床削減、在宅療養支援診療所の推進の為の診療報酬での担保等、当の医療現場の私達は全く知らされないまま突如としてこれらの施策が厚労省より提出されてきました。一体、執行部内で充分検討された上である程度の合意をみたのでしょうか。

いまひとつ、植松執行部の失点は、日医総研活用の後退であります。

次々と厚生労働省や財務省、政府関係機関、健保連や経済界が出してくる医療や介護の提供体制や制度の改革案に対して、有効な対策を出し得ませんでした。昨年10月19日には、厚生労働省が医療制度改革試案を、そして12月1日には政府・与党医療改革協議会が「医療制度改革大綱」を出しましたが、日医はやっと本年1月に入って、その対案の基盤ともなる「生涯を通じた医療と保健と

福祉—改革と推進のヴィジョン（05～09）—」を公表しました。内容は日医総研のワーキングペーパーをまとめたものですが遅すぎます。昨年12月15日には、すでに政府・与党の改革案は決定を見ておるのはご承知の通りです。何故もっと精力的な作業を日医総研に指示し、もっと早くこれを出さなかったのか。去る1月5日の日医ニュース第1064号のオピニオン—各界有識者からの発言—でこれらの日医の対応を批判された日比野守男氏（東京新聞・中日新聞論説委員）の「証文の出し後れ」の指摘が正にこれを物語っています。このように、今回の大巾なマイナス改訂を呑まざるを得なかった診療報酬改定プロセスに代表される植松執行部の政策立案、折衝、達成の欠落、言い換えれば、医療政策集団としての医政へのセンスの欠落に危機感を抱いた、東京都医師会唐澤祥人会長が、次期会長選挙に立候補を表明されました。

「わが国の医療を守る」理念や具体策に関しては、二人の日医会長候補の間に大きな違いはありません。ただはっきり違うのは、植松治雄現会長には、先にも述べましたように、国民的運動の展開を中心に据え、政治へのロビースト活動については、受け身で、少なくともこちらから積極的に働きかけていく姿勢は見られないのに対して唐澤祥人候補はそのマニフェストの中で、大きく掲げてありますように、「政治なくして医政なし、医政なくして医療なし」と、日医としての医政活動の重要性を強く打ち出しています。

且つて、私が日医の「医療政策会議」の委員を務めていました頃（平成14年4月～16年3月）当時の黒川清議長（日本学術会議議長）が「国民医療についての的確な医療施策を提言していけるのは、実際に医療を掌っている医師集団である日本医師会しかない」と強調しておられましたが、私もそう思いますし、また、そうあらねばならないとの信念を持っています。唐澤祥人候補を推す大きな理由はここにあります。

植松治雄現会長にはその理論はともかく、これまでの一期2年間のさまざまな執行部としての行動を拝見していて、次の2年間に、到底その変革と前進のパワーを期待し得ません。

自ら相手の懐に飛び込んでいくような“気迫”や“行動”は望むべくもないと判断するからであります。ここは63歳という若さも然りながら、執行部としての“行動”を強く謳われておられる唐澤祥人候補に私は全幅の信頼を寄せ、共に、あるべき日本の医療を提言し、実現していく医療政策集団としての医師会の活性化を図っていきたいと考えます。

皆様のご支援を是非お願い致します。